

IV-2

多発性骨髓腫における表面抗原解析の意義（過去 3 年間の当科症例における解析）

桃井明仁、瀧澤 淳、阿部 崇、青木定夫、相澤義房

新潟大学大学院医歯学総合研究科血液学分野

[目的] 正常形質細胞と骨髓腫細胞に発現する表面抗原の違いがあること、また骨髓腫症例間にも違いが存在することが知られているが、近年その抗原の発現の差異により骨髓腫細胞の性質や臨床像に違いが認められることが報告されている。今回、当科にて経験した骨髓腫症例およびその類縁疾患における腫瘍細胞の表面抗原を検討したので報告する。[方法] 2003 年 11 月より当科にて経験した骨髓腫症例（初発 15 例、再発 4 例）および類縁疾患（MGUS 3 例、macroglobulinemia 1 例、アミロイドーシス 2 例）における CD38(++) CD138(+) 分画の形質細胞の FACS による表面抗原の検討を行った。[結果] 骨髓腫初発症例(15 例)における発現陽性例は、HLA-DR:12 例 (48%)、CD56:11 例 (44%)、CD184:10 例 (40%)、CD27:9 例 (36%)、CD40:7 例 (28%)、CD45:5 例 (20%)、CD126:4 例 (16%)、CD130:4 例 (16%)、CD20:3 例 (12%)、CD19:3 例 (12%)、CD23:2 例 (8%)、CD33:1 例 (4%) であり CD70、CD10、FMC-7、CD25 は全例陰性であった。そのうち CD19、CD20 の発現と臨床病期（SWOG）との関連が認められた。CD19 陽性例はすべて stage 1 であり、また CD20 陽性例では陰性例に比べより進行例が多く stage 2-3 であった。CD56 の発現の有無による差はなかった。[結論] 症例数は少なく観察期間も短期間であるが、CD19、CD20 発現が骨髓腫症例の予後を反映する可能性が示唆された。